慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	"Holy Hede" 再考 : Sir Gawain the green knightに見るSt. Winifredの表象
Sub Title	
Author	中川, 健司(Nakagawa, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2023
Jtitle	Colloquia (コロキア). No.44 (2023.) ,p.23- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英文学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20231220-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“Holy Hede”再考: *Sir Gawain the Green Knight* に見る St. Winifred の表象*

中川　健司

1. はじめに――謎の地名“Holy Hede”

14 世紀後半にウェスト・ミッドランズで制作された *Sir Gawain and the Green Knight* (以下 *SGGK*) の中に以下のような描写がある。

> Til þat he neȝed ful neghe into þe Norþe Walez.
> Alle þe iles of **Anglesay** on lyft half he haldez,
> And farez ouer þe fordez by þe forlondez,
> Ouer at **þe Holy Hede**, til he hade eft bonk
> In þe wyldrenesse of **Wyrale**; wonde þer bot lyte
> Þat auþer God oþer gome wyth goud hert louied. (ll. 697-702)[1]

これは、主人公である騎士 Gawain がキャメロット (Camylot) を出立し、北の方角へ馬を進める場面であり、作中において旅中の具体的な地名が唯一登場する箇所でもある。つまり、Gawain が辿った道程を復元し、作者が旅の軌跡に込めた象徴をより克明に読み解く上で非常に重要な描写であるといえる。

さて、ここで注目したいのは 700 行の“þe Holy Hede”という地名である。現在の地名で考えると、アングルシー島 (Anglesey) の西北端に位置する港町を指し示すところであろうが、これは、Gawain がアングルシー島を左手に見ながら北進していることから考えるとありえない。となれば、アングルシー島対岸からウィラル (Wyrale) までの地域のどこかを意味していることが推察可能であるが、それは一体どこであろうか。“þe Holy Hede”は *SGGK* のこの箇所にしか登場しない地名であり、これまでもこの謎の地名、ひいては Gawain の旅路の詳細に関して様々な議論が成されてきた。

SGGK を含む現存唯一の写本 London, BL Cotton MS Nero A.x が最初に校訂され出版されたのは 1839 年のことである[2]。R. W. Chambers に拠れば、Gawain はウェールズの北岸をグレート・オーム岬 (the Great Orme’s Head)、バギスト・バンク (the Bagillt Bank) を経由

* 本稿執筆にあたり様々なアドバイスを賜りました松田隆美先生（慶應義塾大学名誉教授）、徳永聡子先生（慶應義塾大学准教授）に感謝申し上げます。

[1] *Sir Gawain and the Green Knight*, ed. by J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, 2nd edn, rev. by Norman Davis (Oxford: Clarendon Press, 1967), p. 20. 強調は筆者による（以下同様）。以下、*SGGK* の中英語校訂版はこれより引用する。

He wanders near to the north of Wales | with the Isles of Anglesey off to the left. | He keeps to the coast, fording each course, | crossing at Holy Head and coming ashore | in the wilds of the Wirral, whose wayward people | both God and good men have quite given up on.; Simon Armitage, *Sir Gawain and the Green Knight* (New York: W.W. Norton, 2007), pp. 67, 69. 以下、*SGGK* の現代英語訳はこれより引用する。

[2] *Syr Gawayne; A Collection of Ancient Romance-Poems, by Scotish and English Authors, Relating to that Celebrated Knight of the Round Table, with an Introduction, Notes, and a Glossary*, ed. by Frederic Madden (London: Printed [for Bannatyne Club] by R. and J. E. Taylor, 1839)

して通過したのであり、“þe Holy Hede”はその間に存在するホーリーウェル (Holywell) を指し示すという[3]。これに対し J. R. R. Tolkien と E. V. Gordon はチェスター (Chester) 沿いを流れるディー川 (the Dee) のチェスターから河口までの何処かであると唱え、彼らの校訂版を改訂した Norman Davis も同様の立場を採った[4]。更に、R. W. V. Elliott はチェスターのおよそ 8 キロメートル南にあるポールトン (Poulton) の水源 (fountain-head) を指すとした他[5]、J. McN. Dodgson は *The Life of St Werburge of Chester* に記録が残るチェスター城の城守 Wyllyam がディー川で行った伝説的渡河と Gawain の旅との関連を指摘し、Tolkin らの説を補強した[6]。これらの学説に対し、Chambers の立場を継承したのが Israel Gollancz[7]、J. A. Burrow[8]、J. S. Ryan である。中でも Ryan は St. Winifred[9]の伝承と *SGGK* との共通点を並べ、「“Holy Head”が St. Winifred を参照していないと見做すのは不可能である」とまで述べている[10]。

このように、“þe Holy Hede”が意味する場所を巡る議論は、ディー川の河口部に位置するどこかであるとする立場と、St. Winifred の聖地ホーリーウェルを指し示すとする立場に大別される。本稿では、*SGGK* が誕生したとされる 14 世紀における St. Winifred 伝承の伝播・信仰状況を確認し、*SGGK* と彼女の聖人伝が有する共通のモチーフを比べることで、ガウェイン詩人の想像界（イマジネール）を再構成し、後者の説を検証する。

2. St. Winifred 伝承の 14 世紀に至るまでの流布状況

SGGK と St. Winifred 伝承の関係を考察するために、ガウェイン詩人の生きた 14 世紀当時の伝承の流布状況および信仰の在り様を確認したい。

初期信仰の二大拠点として挙げられるのが北ウェールズのホーリーウェルとグイセリン (Gwytherin) である。前者は彼女の伝承の要である癒しの泉が存在する町であり、後者はホーリーウェルより南西 40 キロメートルほどにある町で、ホーリーウェルを離れ、同地の女子修道院長として活動した St. Winifred が没したとされる地である。St. Winifred の

---

[3] R. W. Chambers, ‘Sir Gawayne and the Green Knight, II. 697-702’, *The Modern Language Review*, 2.2 (1907), 167 (p. 167).

[4] *Sir Gawain and the Green Knight*, ed. by Tolkien and Gordon, p.97.

[5] R. W. V. Elliott, *The Gawain Country* (Leeds: University of Leeds, 1984), p. 66.

[6] J. McN. Dodgson, ‘Sir Gawain’s Arrival in Wirral’, in *Early English and Norse Studies: Presented to Huge Smith in Honour of His Sixtieth Birthday*, ed. by Arthur Brown and Peter Foote (London: Methuen, 1963), pp. 19-25.

[7] *Sir Gawain and the Green Knight: Re-edited from MS. Cotton Nero, A. X., in the British Museum, by Sir Israel Gollancz, Litt. D., F.B.A. with Introduction Essays by Mabel Day, D.Lit. and Mary S. Serjeantson, M.A., D.Phil*, ed. by Israel Gollancz (London: Oxford University Press, 1940), p. 107.

[8] J. A. Burrow, *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965), pp. 190-94.

[9] St. Winifred の綴りは現在でも一つに定まっていない。彼女の名前の綴りとして Winifred、Winefride、Winefridae、Wenefreda、Wenefred の他にウェールズ名として Gwenfrewy、Gwenfrewi が確認できた。本論では先行研究を参考に英語名 Winifred を採用する。

[10] J. S. Ryan, ‘Sir Gawain and St Winifred: Hagiography and Miracle in West Mercia’, *Parergon*, 4.1 (1986),49-64 (p. 58).

伝承は 7 世紀にまで遡るが、12 世紀以前の信仰を直接観察することは難しく、後述する写本の内容に依拠するところが大きい。ホーリーウェルは現在でも多くの巡礼者を集める信仰拠点だが、今日の教会は 15 世紀に再建されたものであり、当時の情景を知ることは叶わない。とはいえ、物的証拠が全く存在しないわけではなく、彼女の聖櫃 (Arch Gwenfrewy) の一部と目される木片が Gray Hulse によって 1991 年に発見されており、St. Winifred 信仰の存在を垣間見ることが叶う[11]。

St. Winifred 信仰史における一大事件が、1137/38 年に Robert Pennant, Prior of Shrewsbury によって行われた、St. Winifred の遺骸の一部のシュルーズベリー・アビー (Shrewsbury Abbey) への移葬と、それに伴う聖人伝の作成である。この聖遺物の強奪ともいえる移葬および聖人伝の作成は、ウェールズの宗教的シンボルをイングランドに移動させることで、宗教的にウェールズをイングランド化すると共に、St. Winifred の威信をイングランドに移さんとする目論見であり、逆説的にウェールズにおける St. Winifred の影響力の大きさを証明する事件でもある[12]。その後、シュルーズベリーからホーリーウェルへの巡礼路が整備されるなど、北ウェールズの一地方の聖人伝であった St. Winifred 伝承はイングランド周縁のシュルーズベリーを介し、イングランドに拡大していくこととなる。

14 世紀末の 1398 年には Roger Walden, Archbishop of Canterbury によって St. Winifred の祝祭をカンタベリー管区内で執り行うことが命じられ、実際に 1416 年、後継の Henry Chichele によって、同じくウェールズの聖人である St. David、St. Chad と共に祝日を恒久的に祝うことが決定された[13]。政治的区分としてウェールズが正式にイングランド王国の一部となるのは 16 世紀を待たねばならないが、教会行政区分においては、既にカンタベリー大司教管区の下に、ホーリーウェルが属するセント・アサフ (St. Asaph) を始め、セント・デイヴィッズ (St. David's)、スランダフ (Llandaff)、バンガー (Bangor) のウェールズの 4 つの司教区が属する形となっており、イングランドにおいて St. Winifred の伝承が受け入れられる宗教的地盤が構築されていたという背景がある[14]。

増加した巡礼者の中にはイングランドの王侯貴族も存在し、ここからも彼女の伝承に対する信仰の繁栄ぶりを覗い知ることができる。例えば、1115 年、Richard, 2nd Earl of Chester によって巡礼が行われたことが、16 世紀に著された *The Life of St Werburge of Chester* に記録されており[15]、また、1398 年には Richard II がイングランド王として初め

---

[11] Sally Hallmark, 'Gwenfrewy the Guiding Star of Gwytherin: From Maiden and Martyr to Abbess and Saint — The Cult of Gwenfrewy at Gwythein', (unpublished doctorial dissertation, University of Wales Trinity Saint David, 2015), pp. 91-92.

[12] Brian Golding, 'Piety, Politics, and Plunder Across the Anglo-Welsh Frontier: Acquiring the Relics of Winifred and Beuno', in *Monasteries on the Borders of Medieval Europe: Conflict and Cultural Interaction*, ed. by Emilia Jamroziak and Karen Stöber (Turnhout, Belgium: Brepols Publishers, 2014), pp.19-48.

[13] Robert E. Scully, S. J., 'St. Winefride's Well: The Significance and Survival of a Welsh Catholic Shrine from the Early Middle English Ages to the Present Day', in *Saints and Their Cults in the Atlantic World*, ed. by Margaret Cormack (Columbia: University of South Carolina Press, 2007), pp. 202-28 (p. 208).

[14] 山本信太郎,「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼—中世から近世の聖ウィニフリッドの泉」, 上原雅文(編)『神奈川大学人文学研究叢書 43「自然・人間・神々」—時代と地域の交差する場』所収 (東京: お茶の水書房, 2019), pp. 149-84 (p. 162).

[15] Henry Bradshaw, *The Life of Saint Werburge of Chester: Englisht A.D. 1513, Printed by Pynson A.D. 1521, and Now Re-edited by Carl Horstmann*, Early English Text Society, Original Series, 88 (London: N. Trübner & Co., 1887), p.179.

てホーリーウェルへの巡礼を行っている[16]。これは Roger Walden が St. Winifred の祝祭に関して勅命を出した年と同年であり、14 世紀における St. Winifred 信仰の高まりを示す証左といえよう。15 世紀以降も Henry V、Edward IV が巡礼した他、Richard III、Henry VII、Henry VIII らは泉管理のための助成金を下賜しており、ホーリーウェルは王侯貴族の耳目を集める一大聖地であり続けた[17]。このように、14 世紀の St. Winifred 信仰は、次世紀以降もその昂ぶりが続くほどの熱量を有していたのである。

3. St. Winifred 伝承

St. Winifred は 7 世紀に生きたとされる北ウェールズを代表する女性の聖人である。彼女の伝承を伝える写本や印刷本は数多く存在するが、ガウェイン詩人が知り得た内容をより詳細に把握するべく、取り扱う写本は 14 世紀以前の写本として、制作時期順に Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114 (以下 Laud MS)、London, BL Cotton MS Claudius A. v (以下 Cotton MS Claudius)、London, BL Lansdowne MS 436 (以下 Lansdowne MS) の 3 写本に、伝承内容の残存を考察するために、15 世紀制作の Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS (以下 Abbotsford MS) を加えた 4 写本に絞る。

1) Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114 (12 世紀、ラテン語、Pershore Abbey 旧蔵)

Robert of Shrewsbury の *Vita sancte Wenefrede* (Life of the Blessed Winifred; fols. 140r-158r) および聖遺物の移葬を説明した *Translatio sancte Wenefrede* (Tlanslation of Saint Winifred; fols. 158r-163v) を含む聖人伝の写本[18]。恐らく、Robert によるオリジナルの写本では無い[19]。制作年代は最も古く、後述する Lansdowne MS や Abbotsford MS で参考にされている他、15 世紀には William Caxton の聖ウィニフレッド伝 (*Lyf of the holy and blessid vyrgyn saynt Wenefryde*, STC25853) の底本となっている。

2) London, BL Cotton MS Claudius A.v (12 世紀末-17 世紀初頭、ラテン語、Holme Cultram Abbey 旧蔵)

Peterborough Chronicle や William of Malmesbury の *Gesta Pontificum Anglorum* (Deeds of the Bishops of the English) といった歴史書の他に、聖人伝のコレクションを含む写本。その中の *Vita Sancte Wenefrede Virginis* (Life of the Blessed Virgin Winifred; fols. 138r-141r) と *Miracula Sancte Wenefrede Virginis* (Miracles of the Blessed Virgin Winifred; fols. 141r-145v)

---

[16] 多くの資料がイングランド王初の巡礼として 1189 年の Richard I の巡礼を紹介しているが 、これは 18 世紀ウェールズの著述家 Thomas Pennant が Richard, 2nd Earl of Chester の巡礼について言及した箇所を、Richard I によるものと誤読した結果の謬説である。詳しくは Kathryn Hurlock, *Medieval Pilgrimage, c. 1100-1500* (New York: Palgrave Macmillan, 2018), pp. 186, 201; Diana Webb, *Pilgrimage in Medieval England* (London and New York: Hambledon and London, 2000), p.134.

[17] James Ryan Gregory, 'A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512', (unpublished doctorial dissertation, University of Georgia, 2012), pp. 225-26.

[18] Bodleian Libraries, 'MS. Laud Misc. 114', *Medieval Manuscripts in Oxford Libraries* <https://medieval.bodleian.ox.ac.uk/catalog/manuscript_6923> [8 September 2023]

[19] Gregory, 'A Welsh Saint in England', pp. 380-83.

は 12 世紀末から 13 世紀初頭の間に制作された[20]。聖人伝の執筆地候補としてはホーリーウェル近郊のベイジングワーク (Basingwerk) が挙げられている[21]。

3) London, BL Lansdowne MS 436 (14 世紀前半、ラテン語、Romsey Abbey 旧蔵)

43 人の英国の聖人伝がおおよそ年代順に書かれている写本。その 35 番目として *Incipit de sancta Wenefreda virgine et martire* (Here Begins the Life of St. Gwenfrewy, Virgin and Martyr; fols. 107r-109r) が登場し、Laud MS と Cotton MS Claudius の St. Winifred 伝の内容を綜合したものとなっている。当初、Hampshire の Romsey Abbey の修道女らによって所蔵されており、聖人伝の内容も St. Winifred の女子修道者の模範像としての役割を強調する形になっている[22]。この写本によって、14 世紀前半にはイングランド南部において St. Winifred の伝承が受容されていたことが分かる。

4) Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS (1450-75、中英語)

2005 年、Walter Scott が晩年を過ごしたアボッツフォード邸の図書室から発見された写本。逸失したと思われていた Osbern Bokenham による『黄金伝説』(*Legenda Aurea*) の英訳が含まれていたことが Simon Horobin によって指摘された[23]。これには Bokenham が独自に追記した数名の聖人伝が含まれており、*The Lyf of Seynt Wenefrede* (fols. 214v-218v) はその中の一篇である。Bokenham による St. Winifred 伝はこの写本によってのみ伝わっている。恐らく、Robert of Shrewsubry の *Vita et Translatio S. Wenefredae* の他に Ranulph Higden の *Polychronicon*、そして Bokenham 自身がホーリーウェルへの巡礼を通して現地の住民から聞いた伝承をもとに書かれた[24]。

これら 4 写本が伝える St. Winifred 伝のバリエーションを以下に示した (Fig. 1)[25]。中でも「転がる首」と「Winifred に被せられた Beuno の外套」のモチーフに注目したい。これら 2 つは 13-14 世紀の Cotton MS Claudius と Lansdowne MS には現れないながらも、12 世紀

---

[20] British Library, 'Cotton MS Claudius A V', *Digitised Manuscripts* <http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Cotton_MS_Claudius_A_V> [8 September 2023]

[21] Gregory, 'A Welsh Saint in England' pp. 186-87.

[22] James Ryan Gregory, 'Life of St. Winifred: The Vita S. Wenefrede from BL Lansdowne MS 436', *Medieval Feminist Forum. Subsidia Series* 4, *Medieval Texts in Translation* 2 (2015), 1-57 (pp. 1-4, 50-53) <https://doi.org/10.17077/1536-8742.2033>

[23] Simon Horobin, 'The Angle of Oblivioun: A Lost Medieval Manuscript Discovered in Walter Scott's Collection', *Times Literary Supplement*, 11 November 2005, p.12.

[24] Gregory, 'A Welsh Saint in England', pp. 282-95.

[25] 4 写本に共通するモチーフに関しても、後述するものに関しては載せた。それぞれの内容は Laud MS は'*Vita Sancte Wenefrede* (Robert of Shrewsbury; Laud)', ed. by David Callander, *Seintiau* (10 February 2023) <https://saints.wales/theedition/> [8 September 2023] を、Cotton MS Claudius は'*Vita Sancte Wenefrede* (Anonymous; Claudius)', ed. by David Callander, *Seintiau* (25 January 2023) <https://saints.wales/theedition/> [8 September 2023] を、Lansdowne MS は Gregory, 'The Life of St. Winifred', pp. 30-49 を参考にしている。また、Abbotsford MS には未だ出版された校訂版が存在しておらず、本論では Gregory, 'A Welsh Saint in England', pp. 411-21 を参照した。

表で挙げた他にも Beuno 来訪の経緯、Winifred の留守番の理由、Caradoc 訪問の理由、Winifred が求婚を一度断るか否か、Caradoc の死に方といった点が、写本によって異なる。各写本のより詳細な比較は今後発表予定である。

の Laud MS と 15 世紀の Abbotsford MS に共通しており、Robert of Shrewsbury が著した St. Winifred 伝が 15 世紀まで確かに残存していることが確認できる。また、Abbotsford MS の中には Bokenham が実際にホーリーウェルを来訪し住民から伝承を聞いた旨が書き記されており、加えて伝承拡散の要であった Shrewsbury がガウェイン詩人の活動地と考えられるウェスト・ミッドランズに位置することも鑑みれば、14 世紀のガウェイン詩人が Bokenham 同様に Robert の St. Winifred 伝を知り得たことは想像に難くない。以上のことから、*SGGK* と Laud MS 並びに Abottsford MS の St. Winifred 伝との比較検討を進めていく[26]。

	Oxford, Bodleian Laud MS 114 (Laud MS)	London, BL Cotton MS Claudius A. v (Cotton MS Claudius)	London, BL Lansdowne MS 436 (Lansdowne MS)	Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS （Abbotsford MS）
タイトル	*Vita sancte Wenefrede, Translatio sancte Wenefrede*	*Vita Sancte Wenefrede Virginis, Miracula Sancte Wenefrede Virginis*	*Incipit de sancta Wenefreda virgine et martire*	*The Lyf of Seynt Wenefrede*
制作年代	12 世紀	12-13 世紀	14 世紀	15 世紀
製作地	Pershore	Basingwerk?	Romsey	不明
使用言語	ラテン語	ラテン語	ラテン語	中英語
作者	Robert of Shrewsbury	不詳	不詳	Osbern Bokenham
首の行方	教会の中へ転がっていく	地面に落ちたまま	地面に落ちたまま	教会の中へ転がっていく
復活に至る祈り	①頭を体に挿げる ②Beuno の外套を被せる ③鼻孔に息を吹き込む ④Beuno が祈る（祈祷の詳細有り）	①頭を体に挿げる ④'Beuno が祈る（祈祷の詳細無し）	①頭を体に挿げる ④'Beuno が祈る（祈祷の詳細無し）	①頭を体に挿げる ②Beuno の外套を被せる ③鼻孔に息を吹き込む ④Beuno が祈る（祈祷の詳細有り）
首の傷跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡
泉の湧出	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水

Fig. 1 四写本の内容比較

以下で概説するのは、その内の一つ Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114 に見られる伝承の抄訳である[27]。

テゲイングル (Tegeingl) の 3 つの村々を治める領主 Theuith の娘として生まれた Winifred は同地を訪れた St. Beuno の薫陶を受け、純潔の誓いをたてた。両親が St. Beuno の修道院に礼拝へ出かけたある日曜日、体調の悪い Winifred が自宅で一人過ごしていたところに、父を訪ねてきた豪族の息子 Caradoc が Winifred の美貌に見惚れ求婚を申し込む。

[26] 本論で取り扱わなかったウェールズ語版も含む写本との内容比較は Elissa R. Henken, *Traditions of the Welsh Saints* (Cambridge: D. S. Brewer, 1987), pp. 141-51, 348-50 が詳しい。

[27] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert)

Winifred は申し出を受け入れる振りをし、相応しい服装に着替える為と理由を付け寝室に入り、悟られないように St. Beuno の修道院へ逃亡を図った。しかし、逃げる Winifred を見つけ、騙されたことに気付いた Caradoc は、彼女を追いかけ捕まえるとそのまま剣で首を刎ねてしまう。斬り落とされた Winifred の頭は教会の中へ転がって行き、礼拝中の信徒と St. Beuno にこの惨劇を伝えた。St. Beuno が Caradoc に呪いをかけると、Caradoc は大地の裂け目に呑まれていった。あるいは、彼の体が蝋燭のように溶けて消えてしまったと話す者もいた。更に St. Beuno は Winifred の頭を横たえた体にすげ、着ていた外套を被せると、民衆と共に神に祈りを捧げた。すると、頭と胴体が繋がり Winifred は息を吹き返した。首元に一条の跡が残るばかりで、他に傷は一つも無い。彼女の頭が落ち、彼女の血が流れ込んだ大地からは水が溢れ出し、泉を成した。彼女の血液に染まった石が沈み、乳香薫る苔が生える泉は、今日に至るまで様々な病を癒す奇跡の泉として伝わっている。

生き返った後、引き続き St. Beuno から教育を受けた Winifred は、ヴェールによって聖別される。すると、St. Beuno は別の場所へ移ることを彼女に告げ、毎年贈り物を送るように求めた。Winifred が手製の上祭服 (chasuble) を泉に投げ入れると、水の流れを通じ、それは St. Beuno の下に辿り着くのであった。驚くべきことに、上祭服は一切濡れておらず、この奇跡から St. Beuno は「乾いた上祭服の Beuno」(Beuno the Dry-Chasuble) と呼ばれるようになった。

St. Beuno が発った後、7 年の間テゲイングルで過ごした Winifred は神の導きでグイセリンへ移住し、そこの司祭 St. Eleri から指導を受ける。Ereli の母 St. Tenoi の後を継ぎ、女子修道院長となった Winifred はその後、グイセリンで二度目の死を迎えた。

4. *SGGK* 中のモチーフ

具体的なモチーフの比較に入る前に、改めて Gawain が作品世界内で辿った旅路を確認したい。彼の旅路は本論冒頭でも引用した 679-702 行の描写から復元することが可能であり、先述したようにその詳細について多くの議論が成されてきた。Gawain が辿り着く森中の城館や緑の礼拝堂に関しても、現実の地理と照応させてその正体を明らかにする試みがなされている[28]。また、*SGGK* と同時期の 14 世紀に制作されたブリテン島の地図ゴフ・マップ (Gough Map) には、ウェールズ西岸および北岸を通る交通路が記されており、ここからもガウェイン詩人が想定していたガウェイン卿の旅程を確認できる (Fig. 2)。さすれば、ガウェイン卿がウェールズ北岸を東進していく道中に聖ウィニフレッドの聖地ホーリーウェルが位置することは明らかである。

[28] R. W. V. Elliott, 'Landscape and Geography', in *A Companion to the Gawain-Poet*, ed. by Derek Brewer and Jonathan Gibson (Cambridge: D. S. Brewer, 1997), pp. 105-17.

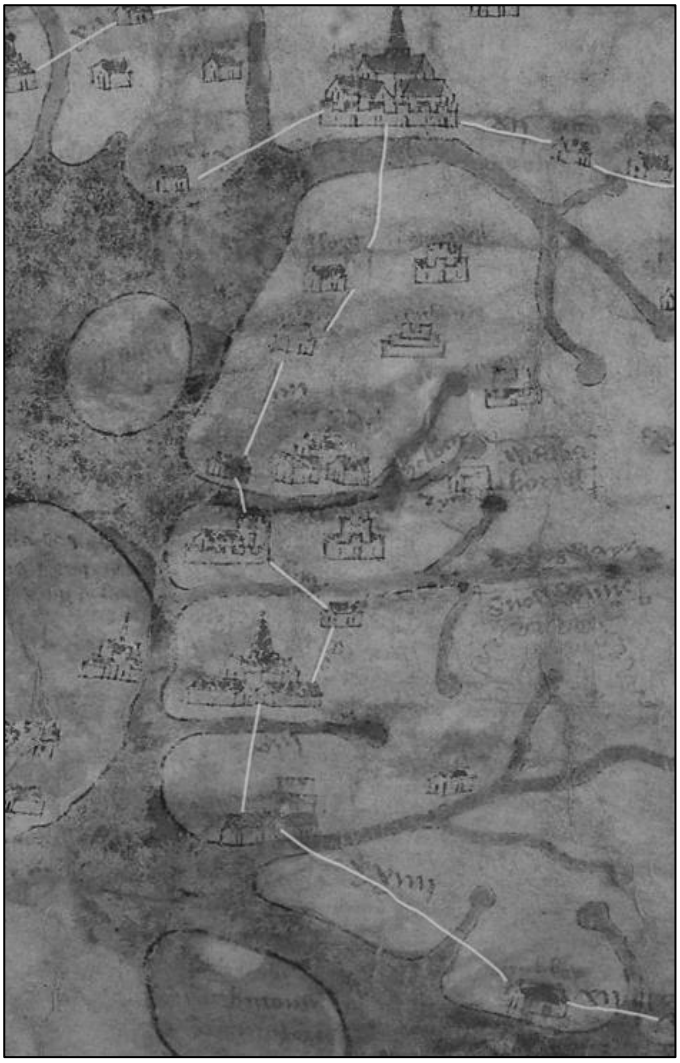

Fig. 2 ゴフ・マップ、北ウェールズ周辺[29]

更に、ガウェイン詩人と読者が作中の言葉から何を想起していたかを考えると、北ウェールズという土地の神秘性が明らかになる。ここで着目するのは、“þe Holy Hede”の前後に登場する 698 行のアングルシーと 701 行のウィラルである。

アングルシーという地名は驚異と深く結びついている。9 世紀頃の作とされる伝ネンニウスの『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*) にはアングルシー島に関する驚異が紹介されている。

> de mirabilibus monię insulę
> [§75] primum miraculum est litus sine mari.

[29] King’s College London, ‘Digital Map’, *Linguitic Geographies: The Gough Map of Great Britain* <http://www.goughmap.org/map/> [8 September 2023]

上方が東を示す。交通路を見やすくするため実線で強調した。画像上中央の建造物がチェスターを表す。

secundum miraculum est ibi mons qui gyratur tribus uicibus in anno.
tertium miraculum est uadum ibi: quando inundatur mare, et ipse inundatur; et quando decrescit mare, et ipse minuitur.
quartum miraculum est lapis qui ambulat in nocturnis temporibus super uallem cihein. et proiectus est olim in uoragine polcerist, qui est in medio pelagi quod uocatur menei, et in crastino super ripam supradictę uallis inuentus est sine dubio.[30]

このように、アングルシーには驚異のイメージが付帯しており、アングルシー島を左手に見ながら進む Gawain の姿を想像した際にも、同様に驚異のイメージが想起されるであろうことは想像に難くない。また、ウィラルは、ガウェイン詩人が「神に対しても人に対しても慈しみの心を持って愛する人はほとんどいない」 (701-02 行) というように、キリスト教の神の愛が失われた荒野として表現される。ここでは、キリスト教の教義は息を潜め、代わりに異教の雰囲気が醸し出されていく。総じて、北ウェールズという土地は当時を生きるガウェイン詩人にとって驚異と異教のイメージを連想させるに足る地域であったといえる。St. Winifred の伝承に登場する「泉の湧出」のモチーフが元々異教の信仰のうちにあったこともここで思い出しておきたい。Gawain の北進と共に、異教に端を発する St. Winifred の伝承のイメージが、聴衆の間で強く想起されたであろう。

さて、“þe Holy Hede”がアングルシー島のホーリーヘッドではなく、St. Winifred の聖地ホーリーウェルを意味していると仮定するならば、この二つの名前がいつから用いられていたのか、その変遷を確認しておく必要があろう。変遷をまとめた表 (Fig. 3) を見ると、ホーリーウェルは 1093 年にはすでに Haliwel の形で表記され、13 世紀末まで継続的に現在の名前と近しい綴りで記録され続けていたことが分かる。ガウェイン詩人が生きた 14 世紀の記録ではウェールズ名のトレファノン (Treffynon) しか見られないが、1699 年以降 Holywell の表記が再び現れることから考えても、ホーリーウェルの呼び名が失われていたとは考え辛い。一方、14 世紀以前のホーリーヘッドはもっぱらウェールズ名のカエル・ガビ (Caer Gybi) に準ずる名前で綴られているが、1315 年には Haliheved 、1322 年には Holiheved の記録が残る。したがって、ガウェイン詩人が使用した “þe holy hede”がホーリーヘッドを意味していなかった、と完全に否定することは出来ない。驚異宿るアングルシーからの連想で “þe holy hede”が登場した可能性も残る。とはいえ、後述するモチーフも併せて考えれば、ガウェイン詩人の “þe holy hede”はホーリーウェルとのより強い結びつきを持っているように思われる。

[30] Keith Fitzpatrick-Matthews, *Genealogia Brittonum: the Complete Historia Brittonum* (2020) <http://www.kmatthews.org.uk/history/hb/historia_brittonum1.html> [8 September 2023] (p. 60). 以下現代英語訳もここから引用。

On the wonders of the Island of Monia | [§75] The first wonder is a shore without a sea. | The second wonder is a mountain there, which turns around three times a year. | The third wonder is a ford there: when the tide is risen, it is also flooded, and when the tide ebbs, it is also diminished. | The fourth wonder is a stone that walks in the night time around the valley Cihein. And it was long ago thrown into the whirlpool Polcerist, which is in the middle of the sea that is called Menei, and on the next day was found without doubt on the shore of the aforementioned valley.

When recorded	Recorded name (Holyhead / Caergybi)	Recorded name (Holywell / Treffynnon)	Source
1093		Haliwel	Thomas
1225 (1316)	Kaerkeby		*Dictionary of the Place Names of Wale* (以下 *DPNW*)
1254	Keyr’	Haliwell’	*Valuation of Norwich*
1284		Halywelle	*Little Wallie*
1291	Castro Kyby	Haliwa	*Taxatio Ecclesiatica Angliae et Walliae*
1291 x 1293		Helywell	The National Archives
1310	Castelkyby		*DPNW*
1315	Haliheved		*DPNW*
1322	Holiheved		*DPNW*
1323	Chastel Keby		*DPNW*
c. 1350		Kastell Treffynnon	National Library of Wales
1352	Caerkeby		*DPNW*
1352	Caerkeby		*RECORD OF CERNARVON*
1568	Caergybi Caergyby Holy Heade Llan y Gwydhel	Saynt Wenefredes Trefynnon	*Cronica* Walliae
c. 1570	kaer gybi	trer ffynon	MS Peniarth 147
1699		Holliwell	*Parochialia* 3
1699		Holliwell Tre Phynon	*Parochialia Edward Lhuyd* vol. 1
1767	Holyhead	Holywell	*Rerurns of Papists* 1767

Fig. 3 地名の変遷[31]

北ウェールズという舞台は斯様にして驚異の様相を帯びてくるが、単純な位置関係に留まらず、*SGGK* と St. Winifred 伝との間には主題や様々なモチーフにおいて具体的な類似性が認められる。

4.1. 信仰に殉ずる生き様

[31] Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, ‘Head Name: Holyhead / Caergybi’, List of Historic Place Names <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/35b7e7ac-800d-48d6-b301-aa5ab26e1dbc> [8 September 2023]; Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, ‘Head Name: Holywell / Treffynnon’, List of Historic Place Names <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/0cb2219f-5c4a-488a-a668-223f881d89de> [8 September 2023] より筆者作成。

St. Winifred は神に純潔を捧げた身として Caradoc の求婚を拒否するが、これは、*SGGK* において「誘惑」(the Temptation) という作品を貫くテーマの一つとして表出する。

Gawain に降りかかる誘惑は、奥方からの性的誘惑と、奥方から贈り物である「護身の腰帯」の誘惑である。結局 Gawain は我が身可愛さに後者の誘惑に負け後述の斬首に繋がる訳であるが、そもそも Gawain は緑の騎士との約束を遵守すべく自身の死をも厭わず旅に出たのであり、本質的には騎士との約束を果たし、奥方からの誘惑を断るという騎士道精神に則る人物として描かれる。すなわち、Gawain、St. Winifred の両者共に自身の信仰を誘惑によって試され、己が信仰の下に殉ずることを選ぶのである。Ryan も指摘する通り[32]、こうした点で Gawain は半ば聖人的な人物といえる。更に Mary-Ann Stouck は緑の騎士のガウェインを導く教導者としての側面に着目し、緑の騎士/ St. Beuno と、Gawain / St. Winifred がパラレルを成すことを見出している[33]。緑の騎士はクリスマスのキャメロットに大ぶりな斧を携えてやって来る闖入者として登場するが、最終的にはガウェイン卿に試練を与え、彼に正しき騎士の道を諭す説教者としての役割が強調されるのである[34]。両作品には純潔と誘惑のテーマが共通しており、こうした類似が *SGGK* による St. Winifred 伝への依拠の背景にあると考えられる。

4.2. 流れ出ずる泉

SGGK ではガウェイン卿がウェールズ北岸を東進する場面以外にも流水が登場する。それは、ガウェイン卿が最終目的地「緑の礼拝堂」に到着した際、礼拝堂の脇を川が泡を立てながら流れる場面であり、その水流は、緑の騎士がガウェイン卿のところにやって来る際にも象徴的に登場している。

> Saue, a lyttel on a launde, a lawe as hit were;
> A balȝ berȝ bi a bonke þe brymme bysyde,
> Bi a forȝ of a flode þat ferked þare;
> Þe borne blubred þerinne as hit boyled hade.
> [...]
> When he wan to þe watter, þer he wade nolde,
> He hypped ouer on hys ax, and orpedly strydez, (ll. 2171-74, 2231-32)[35]

Robert の St. Winifred 伝においても、このような湧水のイメージが、彼女の頭が着地した場所から湧水する場面で同様に見られる。

---

[32] Ryan, (p. 60).

[33] M.-A Stouck, 'Of Talking Heads and Other Marvels: Hagiography and Lay Piety in Sir Gawain and the Green Knight', *Florilegium* 17.1 (2000), 59-72 (p. 64).

[34] 緑の騎士の聖性については D. B. J. Randall, 'Was the Green Knight a Fiend?', *Studies in Philology* 57.3 (1960), 479-91 が詳しい。

[35] except at mid-distance what might be a mound, | a sort of bald knoll on the bank of a brook | where fell water surged with frenzied force, | bursting with bubbles as if it had boiled. [...] At the edge of the water he will not wade | but vaults the stream with the shaft, and strides

> Statimque ut capud uirginis ad terram corruit, in eodem loco fons lucidissimus ubertim erumpens emanauit,[36]

Ryan はホーリーウェルの泉の描写が明確に *SGGK* で用いられたと主張するが[37]、これは噴出する水源とそこから流れ出ずる川のイメージが両者で明確に共通しているからなのである。

しかし、こうした奇跡は St. Winifred に特有のものではない。泉の湧出譚自体はヨーロッパ全域に病気治癒と結びつく土着信仰としてかつて存在しており、キリスト教化に際し洗礼と結びつくなどして、信仰の維持に利用されたのであり[38]、中でもブリテン島には 7000 を越える聖泉が存在する。とはいえ、ウェールズの聖泉を研究した Francis Jones は、ホーリーウェルは中世ブリテンにおいて最も著名な聖泉であったであろうと推測しており[39]、先述した信仰の過熱ぶりを鑑みても St. Winifred の泉が意識されたことは十分考えられる。

加えて指摘したいのは、St. Winifred 伝において湧出する泉は、伝承の後半にて、海岸沿いへ居を移した St. Beuno へ St. Winifred が贈り物を送る輸送路として機能する点である。贈り物の外套が濡れないという奇跡も相まって、Robert の St. Winifred 伝を知る者の意識には強く残ったであろう。

> Videbis statim depositum tuum a fonte per riuum ui diuina deduci, et impetu decurrentis aquę insubtus decurrentem magnum fluuium illesum trahici.[40]

この水流の存在をガウェイン詩人が意識していたとすれば、ガウェイン卿が「一つ一つ浅瀬を横切りながら海岸沿いを進んでいく (699 行)」中で「þe Holy Hede を越えて[ウィラルの] 陸へ到着する(700 行)」のは至極自然な繋がりを保った進行であるように思われる。

4.3. 斬首後の復活

SGGK を貫く大きなテーマとして「報酬の交換」(the Exchange of Winnings) がある。*SGGK* はキャメロットでの「首斬りゲーム」と、森の中の城主と「交換のゲーム」の 2 つの「報酬の交換」が終盤の首斬りに集約される構造を持つ訳だが、前者の首斬りの交換によって、St. Winifred の斬首のイメージは、物語序盤の Gawain による緑の騎士の斬首と、終盤の緑の騎士による Gawain の斬首という 2 つの場面に分割して引き継がれることとなった。

---

[36] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert), pp. 14-15.

And as soon as the virgin's head fell down to the ground, in that place a most radiant spring flowed out, bursting forth abundantly; Ibid., p. 64.

[37] Ryan, (p. 60).

[38] Huw Pryce, 'Pastoral Care in Early Medieval Wales', *Pastoral Care Before the Parish*, ed. by John Blair and Richard Sharpe (New York: Leicester University Press, 1922), pp. 41-62 (p.41).

[39] Francis Jones, *The Holy Wells of Wales* (Cardiff: University of Wales Press, 1992), p. 49.

[40] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert), p. 20.

You will see at once that the gift you set down will be carried away from the spring down the stream by divine power, and by the rush of running water conveyed undamaged into a great flowing river.; Ibid., p.70.

まずは Gawain による緑の騎士の斬首の場面を見る。ここで St. Winifred 伝承とパラレルを成すのは、斬首後地面に落ちた頭が転がっていく様子である。

> Þat þe scharp of þe schalk schyndered þe bones,
> And schrank þurȝ þe schyire grece, and schade hit in twynne,
> Þat þe bit of þe broun stel bot on þe grounde.
> Þe fayre hede fro þe halce hit to þe erþe,
> Þat fele hit foyned wyth her fete, þere hit forth roled; (ll. 424-28)[41]

緑の騎士の首が Gawain に斬られた後、彼の頭はキャメロットの面々に足蹴にされ地面を転がる。一方、Robert による St. Winifred 伝では、Winifred の身体を教会の外に残し、頭が転がって教会の中へ入っていく。

> capud uirginis resectum facile ruendo in ecclesia elapsum est. [...] Inter uero pedes stantium in ecclesia et diuinis misteriis intendentium corruens capud,[42]

Bokenham の St. Winifred 伝でも同様に描写される。

> Hyre heed of at a oo strook he smette
> Wiche doon the body fel doûn to grounde
> In the same place the strook was tan
> But the heed rollyd euene doûn rounde
> And among folkys feet in to the cherche yt ran
> Wherof gretly astoynyd was yche man (ll. 211-16)[43]

教会の中へ入った Winifred の頭は礼拝中の人々の足の間をすり抜け、外の惨劇を生々しく人々に伝えるのである。

転がった頭が蹴られるか否かという違いはあるものの、どちらの頭も人々の足元に転がっていく。Winifred 伝承のこのイメージが、緑の騎士の斬首時の描写に影響を与えたこ

---

[41] The cleanness of the strike cleaved the spinal cord | and parted the fat and the flesh so far | that the bright steel blade took a bite from the floor. | The handsome head tumbles onto the earth | and the king's men kick it as it clatters past.

[42] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert), p. 15.

the virgin's severed head on the slope of that hill easily slipped into the church in falling. [...] But, the head falling down among the feet of those standing in the church and listening to the divine mysteries; Ibid., p. 64.

[43] Gregory, 'A Welsh Saint in England', p. 414. 現代英語訳は私訳。以下、Bokenham の St. Winifred 伝はこれより引用する。

Here the head off at one strike he smote | which did the body fall down to the ground. | In the same place, the strike was taken | but the head rolled even down round | and among people's feet into the church the head ran | whereof greatly astonished was each man.

とは Burrow も指摘するところであり[44]、*SGGK* 冒頭の斬首は Winifred の Caradoc による斬首と相同である。

続いて、緑の騎士による Gawain の斬首の場面である。厳密に言えば、緑の騎士が三度斬首を仕掛け、ガウェイン卿の精神性を試す場面である。この場面での斬首は Gawain が城主と行った 3 日間のゲームおよび奥方からの 3 日間の誘惑と対応しており、3 日目に「護身の腰帯」を城主に渡さなかったガウェイン卿の不義が卿の身に返ってくることとなる。

> Þaȝ he homered heterly, hurt hym no more
> Bot snyrt hym on þat on syde, þat seuered þe hyde.
> Þe scharp schrank to þe flesche þurȝ þe schyre grece, (ll. 2311-13)[45]

三度目の打ち下ろしで、Gawain の首の片側に切り傷ができる。正体を明かした緑の騎士によって、「護身の腰帯」を持ち続けた Gawain の怯懦を咎める三撃目であることが明かされキャメロットに帰還した Gawain は、円卓の面々に自らの傷を不誠実の証として見せる。

> Þe nirt in þe nek he naked hem schewed
> Þat he laȝt for his vnleuté at þe leudes hondes
> for blame. (ll. 2498-2500)[46]

このように、Gawain の口からは首の傷跡が罪の証として語られるが、この傷はもう一つの役目を担っている。それは、緑の騎士による罪の赦しの証である。

> Þou art confessed so clene, beknowen of þy mysses,
> And hatz þe penaunce apert of þe poynt of myn egge,
> I halde þe polysed of þat plyȝt, and pured as clene
> As þou hadez neuer forfeted syþen þou watz fyrst borne; (ll. 2391-94)[47]

斧の一撃は罪に対する罰であり、同時に赦しでもある。Gawain の首の傷はこれらの象徴として機能する。

翻って St. Winifred の伝承を見てみると、St. Beuno の祈祷によって復活を果たした Winifred の首にも傷跡が残っている。

---

[44] Burrow, p. 193.

[45] a ferocious blow, but far from being fatal | it skewed to one side, just skimming the skin | and finely snicking the fat of the flesh

[46] And he showed them the scar at the side of his neck, | confirming his breach of faith, like a badge | of blame

[47] By confessing your failings you are free from fault | and have openly paid penance at the point of my axe. | I declare you purged, as polished and as pure | as the day you were born, without blemish or blame.

> albedo quedam tenuissima in modum fili collum ambiebat, et locum sectionis obducebat. Quod deinceps ad demonstrandam capitis illius resectionem atque miraculi obstensionem, quamdiu uirgo in corpore deguit,[48]

こちらは首の周りを一周する形の細い糸のような傷跡である。St. Winifred の図像には彼女の象徴として欠かさず描かれるものだが、これは奇跡すなわち神の救済を示す証左として機能するものである。

すなわち、Gawain の傷跡も St. Winifred の傷跡も共に救済の証として機能し、Burrow も指摘する通り[49]、*SGGK* 終盤の斬首は復活後の St. Winifred と相同を成すといえる。
斬られた頭が再び繋がるあるいは、首を斬られても死なずに動き回るという筋書きは、聖なる泉と同様に、世界中の神話・民話・伝承に見られ[50]、ウェスト・ミッドランズに住むガウェイン詩人に馴染みある聖人に絞っても、St. Winifred 以外にも多数存在することが Mary-Ann Stouck によって指摘されている[51]。しかし、彼女が挙げた 6 人の聖人、St. Justinian、St. Nectan、St. Fremund、St. Cadog、St. Gwinear はいずれも北ウェールズに所縁のある聖人では無い点には注意したい。斬首されても生き続けるイメージは St. Winifred に特有でなくとも、北ウェールズという地域から連想される「斬首後の復活」のイメージは St. Winifred に帰着するのである。

4.4. 帯と外套

最後に着目するのが「生命への加護を与える布」のモチーフである。これは St. Winifred 伝では「聖バイノの外套」に、*SGGK* では「護身の腰帯」にそれぞれ表象される。

St. Beuno が Winifred を復活させる時、彼は Winifred の頭を身体にすげると、彼の外套を彼女の身体に被せる。

> Postea uero ordine suo illud componens, adegit reliquo corpori, palliumque suum super illud sternens, in naribus illius insufflauit.[52]

また、Bokenham の版では Winifred が再び立ち上がる際にも、Winifred が St. Beuno の外套に覆われていることが明示されている。

---

[48] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert), p.17.

a certain most slender whiteness surrounded the neck in the manner of a thread, and overlaid the place of the cutting. To demonstrate the severing of her head thereafter and to display the miracle, and as long as the virgin dwelt in her body; Ibid., p. 66.

[49] Burrow, p. 193.

[50] 広範な地域の伝承については George Lyman Kittredge, *A Study of Gawain and the Green Knight* (Cambridge: Harvard University Press, 1916), pp. 147-94 が詳しい。

[51] Stouck, pp. 59-72.

[52] *Vita Sancte Wenefrede* (Robert), p. 16.

But afterwards, putting it together in its order, bound it to the rest of the body, and, spreading out his cloak over it, breathed into her nostrils.; Ibid., p. 65.

Wich doon efthsonys he gan yt kysse
And in hyre nosethyrls he blew softely
And wt his mantel curyd yt dede blysse
[…]
And whan thus his preyere endyd had Beunoon
And al the peple had answerd deuouhtly
Amen from undyr his mantel anoon
Wenefrede roos up euene sodeynly (ll. 303-05, 359-62)[53]

このように、St. Beuno の外套は Winifred の復活において象徴的に癒しの働きを担っているといえる。

SGGK 内でこれと同じ役割を持つのが、Gawain が奥方から贈られた「護身の腰帯」である。其は「緑色をした絹製の(1832 行)」帯であり、それを締めている限り、天下の誰からも切り倒されることは無いという謂れを持つ。

For quat gome so is gorde with þis grene lace,
While he hit hade hemely halched aboute,
Þer is no haþel vnder heuen tohewe hym þat myȝt,
For he myȝt not be slayn for slyȝt vpon erþe.' (ll. 1851-55)[54]

Gawain に下された斬首ではわずかな傷を付けるに留まったため、腰帯の霊験が効力を発揮することは無かったように思える。しかし、物語最終盤にて件の腰帯が緑の騎士のものであることが判明する (hit is my wede þat þou werez, þat ilke wouen girdel, / the belt you are bound with belongs to me;, l. 2358) ことで、ここに新たな視座が開かれる。序盤にキャメロットを来訪する緑の騎士の装飾具の一つには、同じく絹でできた緑の帯があった。

Heme wel-haled hose of þat same,
Þat spenet on his sparlyr, and clene spures vnder
Of bryȝt golde, vpon silk bordes barred ful ryche,
[…]
And alle his vesture uerayly watz clene verdure, (ll. 157-59, 61)[55]

これは拍車を足に結わえ付けるためのもので、厳密には腰帯ではないが、Gawain による斬首で絶命に至らなかった緑の騎士の不死性が、彼の装飾具に由来するものであると考える（に聴衆が思い至る）のはそう難しいことではなかろう。序盤の驚異の伏線がこの段に

[53] Which did often he began it kiss | And in her nostrils he blew softly | And with his mantle cured it [with] blissful deed […] And when thus his prayer ended had Beuno | And all the people had answered devoutly | Amen from under his mantle immediately | Winifred rose up even soddenly

[54] For the body which is bound within this green belt, | as long as it is buckled robustly about him, | will be safe against those who seek to strike him, | and all the slyness on earth wouldn't see him slain."

[55] On his lower limbs his leggings were also green, | wrapped closely round his calves, and his sparkling spurs | were green-gold, strapped with stripy silk, […] In all vestments he revealed himself veritably verdant!

至って回収される物語構造は見事という他あるまい。結果として、*SGGK* では、腰帯が与える護身の加護が St. Winifred 伝よりもより直截的に示されることとなっている。そして、「この生命への加護を与える布」というモチーフに二つの物語の共通点を見出すことが可能となるのである。

5. 結論

ガウェイン詩人に関して判明している情報は少なく、彼が実際に北ウェールズ、ひいてはホーリーウェルを実際に訪れていたかは定かではない。しかし、彼の活動地であるとされるノース・ウェスト・ミッドランズには St. Winifred の遺骸が移され、彼女の伝承を広めるハブとなったシュルーズベリーが位置している。カンタベリー大司教による祝祭敢行の布告や王侯貴族の巡礼から窺える 14 世紀における St. Winifred 信仰の熱量も踏まえれば、彼が St. Winifred の伝承に触れていたことはほぼ間違いないと言える。

このことは、*SGGK* と St. Winifred 伝との間に様々なパラレルが見られることからも補強される。緑の騎士の斬首時の描写と Gawain の首の傷跡が St. Winifred の斬首と復活にそれぞれ対応している。Gawain、St. Winifred 両者共に生命への加護を与える布と縁深く、更には共に信仰に対する試練として異性に誘惑され、これを克服する。水が湧出し、川となって流れ行くイメージも共通して見られる。

もちろん、斬首後の復活、流れ出ずる水のイメージは St. Winifred に特有のものではない。しかし、これに Gawain の旅路から導出される北ウェールズという地域を併せて考えれば、“þe Holy Hede”と St. Winifred の間には、類似の伝承を持つ他の聖人と比べものにならない程の強固な繋がりが見えてくる。

一般的に騎士道物語として解釈される *SGGK* であるが、その背景並び基層に存在する地方の聖人の伝承を除外して考察することは叶わない。Cotton MS Nero A.x という写本単位で考えれば、含まれるその他の作品が宗教的に読まれ解釈されることからも、*SGGK* を騎士 Gawain という半ば聖人的側面を持つ人物の聖人伝として読むことは矛盾を引き起こさない。作品を貫くテーマや種々のモチーフを複層的に絡み合わせ、ガウェイン詩人の想像界（イマジネール）を再構築することで、謎の地名として現れる“Holy Head”が St. Winifred の聖地ホーリーウェルの、そして彼女の「聖なる頭」の表象であることが傍証されるのである。

参考文献

Armitage, Simon, *Sir Gawain and the Green Knight* (New York: W.W. Norton, 2007)

Bodleian Libraries, 'MS. Laud Misc. 114', *Medieval Manuscripts in Oxford Libraries* <https://medieval.bodleian.ox.ac.uk/catalog/manuscript_6923> [8 September 2023]

Bradshaw, Henry, *The Life of Saint Werburge of Chester: Englisht A.D. 1513, Printed by Pynson A.D. 1521, and Now Re-edited by Carl Horstmann*, Early English Text Society, Original Series, 88 (London: N. Trübner & Co., 1887)

British Library, 'Cotton MS Claudius A V', *Digitised Manuscripts* <http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Cotton_MS_Claudius_A_V> [8 September 2023]

Burrow, J. A., *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight* (London: Routledge & Kegan Paul, 1965)

Callander, David, ed., '*Vita Sancte Wenefrede* (Anonymous; Claudius)', *Seintiau* (25 January 2023) <https://saints.wales/theedition/> [8 September 2023]

Callander, David, ed., '*Vita Sancte Wenefrede* (Robert of Shrewsbury; Laud)', *Seintiau* (10 February 2023) <https://saints.wales/theedition/> [8 September 2023]

Chambers, R. W., 'Sir Gawayne and the Green Knight, II. 697-702', *The Modern Language Review*, 2.2 (1907), 167

Dodgson, J. McN., 'Sir Gawain's Arrival in Wirral', in *Early English and Norse Studies: Presented to Huge Smith in Honour of His Sixtieth Birthday*, ed. by Arthur Brown and Peter Foote (London: Methuen, 1963), pp. 19-25.

Elliott, R. W. V., *The Gawain Country* (Leeds: University of Leeds, 1965)

—— 'Landscape and Geography', in *A Companion to the Gawain-Poet*, ed. by Derek Brewer and Jonathan Gibson, (Cambridge: D. S. Brewer, 1997), pp. 105-117.

Fitzpatrick-Matthews, Keith, *Genealogia Brittonum: the Complete Historia Brittonum* (2020) <http://www.kmatthews.org.uk/history/hb/historia_brittonum1.html> [8 September 2023]

Golding, Brian, 'Piety, Politics, and Plunder Across the Anglo-Welsh Frontier: Acquiring the Relics of Winifred and Beuno', in *Monasteries on the Borders of Medieval Europe: Conflict and Cultural Interaction*, ed. by Emilia Jamroziak and Karen Stöber (Turnhout, Belgium: Brepols, 2014), pp. 19-48.

Gollancz, Israel, ed., *Sir Gawain and the Green Knight: Re-edited from MS. Cotton Nero, A. X., in the British Museum, by Sir Israel Gollancz, Litt. D., F.B.A. with Introduction Essays by Mabel Day, D.Lit. and Mary S. Serjeantson, M.A., D.Phil.* (London: Oxford University Press, 1940)

Gregory, James Ryan, 'A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512', (unpublished doctorial dissertation, University of Georgia, 2012)

—— 'The Life of St. Winifred: The *Vita S. Wenefrede* from BL Lansdowne MS 436', *Medieval Feminist Forum*, *Subsidia Series* 4, *Medieval Texts in Translation* 2 (2015), 1-57 <https://doi.org/10.17077/1536-8742.2033>

Hallmark, Sally, 'Gwenfrewy the Guiding Star of Gwytherin: From Maiden and Martyr to Abbess and Saint — The Cult of Gwenfrewy at Gwythein', (unpublished doctorial dissertation, University of Wales Trinity Saint David, 2015)

Henken, Elissa R., *Traditions of the Welsh Saints* (Cambridge: D. S. Brewer, 1987)

Horobin, Simon, 'The Angle of Oblivioun: A Lost Medieval Manuscript Discovered in Walter Scott's Collection', *Times Literary Supplement*, 11 November 2005

Hurlock, Kathryn, *Medieval Pilgrimage, c. 1100-1500* (New York: Palgrave Macmillan, 2018)

Jones, Francis, *The Holy Wells of Wales* (Cardiff: University of Wales Press, 1992)

King's College London, 'Digital Map', *Linguitic Geographies: The Gough Map of Great Britain* <http://www.goughmap.org/map/> [8 September 2023]

Kittredge, George Lyman, *A Study of Gawain and the Green Knight* (Cambridge: Harvard University Press, 1916)

Madden, Frederic, ed., *Syr Gawayne; A Collection of Ancient Romance-Poems, by Scotish and English Authors, Relating to that Celebrated Knight of the Round Table, with an Introduction, Notes, and a Glossary* (London: Printed [for Bannatyne Club] by R. and J. E. Taylor, 1839)

Pryce, Huw, 'Pastoral Care in Early Medieval Wales', in *Pastoral Care Before the Parish*, ed. by John Blair and Richard Sharpe (New York: Leicester University Press, 1922), pp. 41-62.

Randall, D. B. J., 'Was the Green Knight a Fiend?', *Studies in Philology* 57.3 (1960), 479-91.

Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, 'Head Name: Holyhead / Caergybi', *List of Historic Place Names* <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/35b7e7ac-800d-48d6-b301-aa5ab26e1dbc> [8 September 2023]

Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, 'Head Name: Holywell / Treffynnon', *List of Historic Place Names* <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/0cb2219f-5c4a-488a-a668-223f881d89de> [8 September 2023]

Ryan, J. S., 'Sir Gawain and St Winifred: Hagiography and Miracle in West Mercia', *Parergon*, 4.1 (1986), 49-64.

Scully, Robert E., S. J., 'St. Winefride's Well: The Significance and Survival of a Welsh Catholic Shrine from the Early Middle English Ages to the Present Day', in *Saints and Their Cults in the Atlantic World*, ed. by Margaret Cormack (Columbia: University of South Carolina Press, 2007), pp. 202-28.

Stouck, M.-A., 'Of Talking Heads and Other Marvels: Hagiography and Lay Piety in Sir Gawain and the Green Knight', *Florilegium* 17.1 (2000), 59-72.

Tolkien, J. R. R. and E. V. Gordon, eds., *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd edn, rev. by Norman Davis (Oxford: Clarendon Press, 1967)

Webb, Diana, *Pilgrimage in Medieval England* (London and New York: Hambledon and London, 2000)

山本信太郎,「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼—中世から近世の聖ウィニフリッドの泉」, 上原雅文(編)『神奈川大学人文学研究叢書 43「自然・人間・神々」—時代と地域の交差する場』所収 (東京: お茶の水書房, 2019),pp. 149-84.